# 2025 年度　海外研修 A（韓国）

探究活動報告

１．韓国の屋台文化について（河合さやか）

今回の研修では、韓国の屋台文化について探究した。調査を通して、屋台の役割は地域によって異なることがわかった。都市部では、韓国料理を手軽に楽しめる場として観光客向けの要素が強く、短時間で食べ歩きができるようなメニューや雰囲気が特徴的であった。一方で、地方では、屋台は地元の人々が日常的な食事として利用する場となっており、観光というよりも生活の一部として根付いている様子が見られた。これらの違いから、韓国の屋台文化は単なる飲食の提供にとどまらず、その地域の人々の生活スタイルや価値観を反映しているものであると感じた。特に、地方における屋台は人と人とのつながりを感じられる場としての役割も担っており、コミュニケーションの場としても重要な意味を持っていると考えられる。また、韓国の屋台には人との距離の近さや温かさが感じられるという魅力がある。

今回の研修を通して、食文化は単に食べ物だけでなく、その背景にある人々の暮らしや社会のあり方と深く結びついていることを学ぶことができた。今後は、他国の文化を理解する際にも、このような視点を大切にしていきたい。

２．韓国の「まちづくり」について ～磐田市と比較して～（鈴木伊織）

ソウル特別市では、道路が優先的に作られた後に建物が建てられているように感じた。郊外においても道路は広く、車の往来がしやすくなっている。公共施設は基本的に地下鉄駅のすぐ目の前にあり、地下鉄が有効である限りアクセスは非常に良い。ソウルは山に囲まれた地形のため住宅地には急勾配の道が見られ、街並み全体は東京のようだが、明洞は大阪の道頓堀のような店舗の密集度合いであった。また、日本では高い建物と低い建物が混在しているが、ソウルでは地区によって建物の高さがはっきりと分かれている。

歴史面では、戦場であった背景から建物が復元されたものであることや、地下道が緊急時のシェルターを兼ねているなど、有事への備えが感じられた。日本との相違点では、信号を守らない車もあり、歩行者優先の日本との文化的な違いがある。一方で、古い家屋をリノベーションしてお店を展開する点は共通しており、韓国では残す場所と残さない場所を区別していることが分かった。